

皆様の課題をICTで解決する

DAIKO

http://www.daikodenshi.jp

FUJITSU

大興電子通信株式会社

# CHIBA UNIVERSITY PRESS

江戸川大学  
ユニバーシティプレス

大学生記者が編集

海外での仕事に憧れを持ち、大学時代に韓国を訪れたが、自分が日本の文化を知らないことを痛感した。帰国後、自分の国の文化を知るためにつまみ細工

「江戸つまみかんざし」の県指定伝統的工芸品製作者、藤井彩野さんは、現代的な発想で、新しい伝統の形を切り開いている。正方形に小さく裁断した絹の生地をピンセットでつまんで手作業で花びらを作る。江戸時代の人たちがとって、つまみかんざしは日常的なアクセサリーの一つだった。「多くの人に、このすてきな工芸を知ってもらいたい」と。つまみかんざしは、ピアスや髪飾り、アロマディフューザーなど、現代の人たちが使える商品を次々と生み出した。

## 江戸つまみかんざし

## 日常に彩り、海外進出も



花びらをつまんでいる藤井彩野さん

のワークショップに参加した。これが、藤井さんとつまみ細工の出合いだった。大学卒業後、呉服店で働きながら独学で技術を習得。伝統にとらわれず、現代の人が手にとりやすいデザインを考えた。今では、国内にとどまらず、中国をはじめとした海外の店舗にも展開が広がった。

学生時代に憧れた海外での仕事。そして今の夢であるつまみ細工を多くの人に知ってもらうこと。「20年前の自分の夢もかなっているし、今の自分のやりたいことも少しずつ現実のものになっていく」と笑顔で話してくれた。(大濱李緒、チヨナヒョン、対馬琴音)

夏は風物詩の代表として花火は長い間輝き続けている。柏市箕輪に店舗を構える老舗の花火専門店、高城煙火店は明治後期から100年以上営業している。書き入れ時のシーズンに向け、一年を通して花火を製造し続けている。大玉になると重さは15kg。大会前には早朝から深夜まで休みなく働くこともある。

重労働が敬遠され、担い手が減り、職人の高齢化で継承を断念する店も多い。そんな中、同店では代表で4代目の高城勇さん(84)を中心に、息子の渉さんと長女の加賀菜穂子さんから家族や親戚が店を支える。「小さい頃から

## 打ち上げ花火

## 父から子へ 家族で手作り



花火の製作に取り組む高城勇さん(右)と息子の渉さん

父の仕事を見ていて継ごうと思った」と渉さんは話す。それでも、夏の花火大会のシーズンになると、家族だけでは仕事が回せない。そんな時に店を支えるのが地域の人の手。普段は、自営業や農家、大工をしている人、一般企業で働く人もいる。今は経営をやめた花火師の人も応援に駆け付けるという。「手伝うのを

今回取り上げた三つの工芸品は、全て千葉県指定の伝統的工芸品に指定されている。指定の基準については県は、「製造過程の主要部分が手工業的であること、伝統的な技術又は技法により製造されたものであること、主たる原材料が、伝統的に使用されてきたものであること、おおむね10年以上、県内で製造されているものであること」としている。

房州うちわの太田美津江さんは1997年、打ち上げ花火の高木勇さんと江戸つまみかんざしの藤井彩野さんは2017年に千葉県指定伝統的工芸品製作者として指定された。

# 多様な形で継承、変化も

## 千葉県の伝統工芸品

江戸からの文化が長く受け継がれている千葉県。海に囲まれ、自然豊かな風土が多様な文化を発展させた。伝統工芸品は、人手不足

や職人の高齢化といった問題点がある一方、新しい形で進化を遂げている。従来の伝統工芸品が、時代の移り変わりとともに変化し、新しい風をもたらし続けている。房州うちわ、江戸つまみかんざし、打ち上げ花火の3点から千葉県の伝統工芸品の今を考える。

# 移住者も職人へ伝習会

## 房州うちわ

一本の竹を細かく削って広げていく。鮮やかな糸で編み、綺麗な紙や布を貼る。さまざま工程を経て、上品で美しい「房州うちわ」が出来上がる。

房州うちわ振興協議会は平成25年度から入門講座を開講している。講座では、うちわ作りについて、講師の太田美津江さんは「今までの全21工程を、実際に作業を学びながら身に付けていく。受講後は伝習会に参加、経験を積み一定以上の技量が認められれば協議会の認定職人になることが出来る。同協議会の認定職人(穂子)である吉良明美さん(51)は、「仲間たちと教え合う時間が宝物」と語る。

## 仲間との出会い「宝物」に



伝習会で練習する参加者ら

ら房州うちわが身近な存在だった。「うちわ工房 和」は、母親の和子さんが立ち上げた工房だ。現在は、和子さんと一緒に長年うちわ屋を支えてきた職人たちが制作に携わっている。職人の高齢化は進んでいるが、工房のうちわを楽しみにする客もおり、その架け橋になろうと工房の経営を受け継いだ。教員時代のキャリアを生かし、小学校での出前授業でも伝統を次世代に伝えている。「手仕事だから、職人の思いが込められている」と房州うちわの魅力語る。60年以上うちわを作り続けるベテラン職人でも、いまでも綺麗に仕上がると喜ぶとのこと。売る側として、作り手の思いを大切にしていきたいという。(田辺里穂子)

## 第二の人生 伝統を次世代へ



工房への思いを話す三平智子さん

## 作り手との架け橋に

第二の人生として、地域の伝統を継承しようとする人もいる。教職を退き、房州うちわに携わる道を選んだ「うちわ工房 和」の三平智子さん(63)。2019年3月まで、南房総市の中学校で校長を務めていた。両親の実家がうちわ屋で、幼い頃から

空けておいてくれる人も。皆さんのおかげで続けることができています」と勇さん。手賀沼の花火大会のような大きなイベントだけでなく、地域の小さなお祭りや学園祭の花火でも、花火の打ち上げを手がけている。勇さんは、「大きい花火大会もいけれど、地域の方がもっと身近に感じられるような花火を打ち上げたい」と話す。地域ぐるみでつなげていく、新たな継承の形で前に進む。(八木屋すもも、森安通、石川綾捺)